

片山 克物語 「朴の道」完成

2021年8月8日88歳で逝去された片山 克さん評伝記の本が出来上がりました。

この本の出版は2017年（平成9年）1月6日、お元気であられた片山 克さんと私の間での「真民さんと『誠実な友情』で結ばれていた20年の真実を伝える」趣旨の本を共同で出版することを約束したことから始まりました。『誠実な友情』が綻び始めのは2004年2月2日(第8回全国朴の会終了の翌日)から、理由不明のまま亀裂は深刻さを増していきました。その理由を私が片山さんご夫妻にお伝えしたのが2017年1月6日でした。お二人にとっては青天霹靂の驚愕で、全く想像も出来ない内容でした。その日から片山 克さんの奮起が始まりました。

「真実を明らかにしたい！」と絶叫、煩悶模索して考えだしたのが「真実を伝える書籍を作る」ことでした。ご存命中の完成はできませんでしたがこの度片山 克さんが書き続けられた「詩国の朴」全214号をもとに「片山 克物語」を上梓することができました。片山絢子奥様には多大のご協力を賜り、執筆もしていただきました。

末尾には片山さんの「詩国の朴」を原本のまま26ヶ月分を掲載しました。片山 克さんの文字を懐かしく拝見することができます。

又、214号全部の概要を記載した年表も資料として載せました。毎月の真民さんの活動の概要が記されています。資料としても貴重な内容となり320頁の大共著になりました。

「朴の道」の由来について

この本の題名について奥様と長い時間をかけて熟考してきました。本の内容は「真民さんと歩んだ20年」ですが、その歩みの実質を鑑みて「真民讃歌に尽くした20年の歩み」と副題を決めました。本題は慎重な話し合いを繰り返し「朴の道」としました。なぜそうしたのか。

「朴」の文字も「道」の文字も真民さんの一字の直筆です。（p20,27）

「朴」は坂村真民さんが最も愛した木であり、詩集には「朴」と題する本も出版されるほど「朴」に関する詩は多く、「真民さんは朴は私自身だ」と言われるほどに愛着を持たれていた木です。

私はある年の晩秋にお伺いした時「なぜ、朴がそんなにお好きなのですか」と尋ねました。真民さんは、一呼吸して、しばらく沈黙して、話し始められた。



「朴は深山（名木）にあって目立たない木だが、大木で天に向かって真っ直ぐに伸びており、堂々としている。私はそんな人間になりたいのだ。朴の側^{そば}にいたいと願って庭に朴を植えたら素直にすくすく育って5月には白い綺麗な花を咲かせる、その香りがまた何とも言えんのだ。今日夜明け前に、葉が一枚落ちた。私はその音を聴いてすぐにその葉を拾いに外へ出た。その葉に『念ずれば花ひらく』と一気に書いた。そして春の再会を楽しみにしている。朴はなあ、何に用いられているか知っているかね。下駄だよ。下駄の歯だよ。わしは子供のころ下駄を作って売りに行ったことがある。貧乏だったからなあ。下駄には悲しい思い出が籠っている。」（下駄と真民さんの関係は真民さんの著作に詳しく載っていますので割愛します）

中学生の時、おそらく極貧が最高潮に達していた頃、母を助けて下駄を売りに出た、それが生計に役立った。5人の兄弟が命を繋いだ思い出があるので、下駄の材料となった「朴」を自分自身だと言われたのであろうと私は思う。下駄の歯は朴の木から作られていた。自分は今、その朴の木に助けられているが、いつか朴の木のように人知れずとも天に向かって真っ直ぐに育ちたい。そして純白の花弁になり、香りのいい人間になりたいと誓ったのではないだろうか。

真民さんの話は続いた。



「未明混沌の時に朴の葉が落ちた。あんたにはその音は聞けまい。私には聞こえる。私は『念ずれば花ひらく』と書いたが、この大きな葉は食物を包んで保存したり、そのまま焼いたりして調理の道具にもなる。朴葉寿司、朴葉味噌も有名だろう。包み込むという寛大さがある。この包むの音読みが「朴」になったと言う説もある。そしてなあ、花言葉は『誠実な友情』だよ。いい響きがするだろう。素朴という字もある。自然のまま、ありのまま、嘘がないんだよ。だから花が純白、そんなところから昔の人がこの木に付けた花言葉だろう。朴訥も謙虚で好きな言葉だよ」

片山 克さんはこの花言葉「誠実な友情」の虜になりました。ご自分の琴線に触れた言葉であったのでしょう。片山 克さんの誠実な人柄に惚れ込んだ真民さんが男の約束を結ばれてその証として贈ったのが左上の写真の文字です。この文字は真民さん70歳代の文字で力強い。真民さんは多くの書を書いてこられたが、この形の大きな字はこれ一つでご自分が一番すきな字で誰にもあげなかった。これを片山 克さんにプレゼントしたのは1987年11月であった。（実寸縦42cm,横33cm）

「真民さんは『タンポポやつゆくさはどうぞと地元の読書会にあげたが 朴だけは誰にもあげなんだ。これは私の分身、いや、私自身だから……あなたにあげる。」「朴の花の花言葉は『誠実な友情』だ。あんたは信頼できる友だ、生涯、誠実な友でいてもらいたい」と言って、自分が大切にしていた「朴」の一字を片山さんに贈られた」（本文p19より）「朴の道」の朴は真民さん直筆から命名したのです。



「道」は真民さんが片山^{こうき}絢子さんの苦勞と忍耐に感謝して絢子さんの依頼に基づいて剛毅して授与されたものです。（実寸縦53cm,横46cm）（本文p27より）真

民さんは多くの人々から依頼されて万を超える文字を書いてこられたが一文字は、「朴」に次いで2作目であり他には目にしたことはありません。この「道」も変わった形になっています。

「朴」同様に文字の右側に上から下への筆跡が見えます。これは何を意味するのでしょうか。天から降ってきた道（豊かな恵み）ではないだろうかと筆者は考えました。

「真民讃歌に尽くした20年の歩み」は片山 克さん片山絢子さん夫妻が真民さんに寄り添い、相談相手となり、真民さんの孤独を慰めた日々であったと私は思います。その思いから、閃いたのがこの本の題名です。表紙の文字もこの二文字を用いて御三方への敬意を表しています。

朴には真民さんも宿っておられる。片山 克さんの「誠実な友情」も貫徹しています。道は片山絢子さんの忍耐と勇気と希望がこもっている。お二人は苦難をも誇りとされました。「苦難が忍耐を生み、忍耐が品格を生み、品格が希望を生むことを知っているからです」（ローマ信徒への手紙5章④・聖書協会共同訳）

(小原靖夫記)



本の裏表紙

「まえがき」と「あとがき」を掲載します。

真民讃歌に尽くした20年の歩み

朴の道

まえがき

本書の目的は片山 克さんが坂村真民さんを人生の師として誠心誠意仕えられた1984年（昭和59年）からの20年と「誠実な友情」が頓挫して世間の風評に苦しめられた17年間の日々、そしてその激苦を乗り越えられ「真民は偉大なり」と叫んで逝かれた人間讃歌を後世に残すために記すものです。

郷土愛が人一倍強かった片山さんは愛媛県に「こんなに偉大な詩人がいるのに、知らなかった自分を悔い、多くの人に知って欲しい」と願い勤務していた伊予銀行高松支店長の時にロービー展を開き香川県の人に伝えることを始められた。その後「自選坂村真民詩集」の森 信三先生の序文にいたく感動され全国に、速やかに真民詩を広めたいと熱い情

熱に燎原の如く火がついき、真民詣でが始まり、「誠実な友情」という花言葉をもつ「朴の木」のもとで「男の約束」が結ばれ、「詩国の朴」の活動が真民さんに納得してもらえた。

一方、真民さんも森 信三先生の序文に勇気づけられ、「人類の平和と世界の幸福のためタンポポの如く風雪に耐えゆく人たちと手をつないでゆきたい」と、日本全国に拠点を持ちたいとの野望に燃えていた。片山さんはこのことについての第一次資料はご存じではなかったが両者のベクトルは偶然に一致していた。知らずして片山さんは「全国朴の会」を組織し真民詩の普及に信じられないほどの情熱を傾けられた。

そして真民さんの念願であった「飛ぶ鳥跡を濁さず」の引退の日を美しく祝う日がやってきた。そして盛大な祝典が片山さん夫妻の尽力で開催された。実に美しいフィナーレであった。これで終われば、この編者の拙文も必要ではなかった。すべてのことが、そしてすべての人が幸せに真民詩を後世に語り継ぐことができたのです。

その日の翌日に最初の門前払いがあった。片山夫妻は大いに躊躇されたが、「鳩寿」の続刊を援助することを続けるために必要なことをされた。「鳩寿」が15号で終刊となった2005年9月無言のうちに実質的な門前払いがあった。そのとき編者は独り呼び出しを受け病院に見舞うことになった。その折に門前払いの理由を聞かされて私は啞然としました。

他言することが許されない言葉でした。他言は片山さんのみならず真民さん自身おも傷つく内容であった。そんなことが「誠実な友情」で結ばれて「男の約束」を何度も交わされたお二人の間にあってはならない、あるはずのない、想像もつかないことでした。私さえ黙しておれば問題は起こらないと考え、片山 克さんとも11年間親しく話すことを避けてきました。

しかし、どこともなくその風評は地脈のように伝播して、東京の友人から私に真偽のほどを問うという知らせが入り、「知らぬは片山さんのみ」という状況になっていることがわかりました。そこで。私は勇気をふりしぼって2017年(平成28年)1月6日片山さんの自宅を訪れ、「あるはずのない」ことを伝えました。お二人は奈落の底に落とされました。門前払いの原因をあれかこれかと気を揉んでおられたが、私の話はまったく心当たりのない予測だにしなかったことである。死ぬほど辛い思いから抜け出すために命をかけて「真民さんの真実」を追い求められた。その苦行の最中に癌の病が襲ってきた。2年半に及ぶ闘病と真実を追求する日々が夫妻の日常となりました。この世を旅立たれる一月前には真民さんのお墓に詣でられた。「間もなく私も行きますよ」と報告したのかもしれない。三日前に突然「真民は偉大なり」と叫ばれた。これほどの人間讃歌が他にあるであろうか。その記録の一部をここに記した次第です。この記録は片山 克さんが毎月発刊された「詩国の朴」を引用、転写し編集したものです。

ここには片山絢子様の手記を引用させていただきご夫妻の真実が更に明かになりました。奥様には本文の校正のみならず事実の検証にもご協力いただきましたこと感謝でございます。読者が築かれた真民詩が片山 克さんの思いを乗せて世界に羽ばたくように祈ります。

2023年8月8日

編集責任者

小原靖夫

あとがき

片山 克さんの3回忌にはこの本の編集が終わると約束をしていました。そしてその日が近づき、改めて回想して「人はどこまで愛することができるのだろうか。人はいとも簡単に愛する人を憎むことができるのだろうか。人間とはいったい何だろう」と考えざるを得ません。片山 克さんが「恩讐の彼方に」あったものは許しであったと私は思います。

私が黙秘すべきかせざるべきか11年間悩んだ末に片山 克さんに「あの日の会話」を告白してから4年間の片山 克夫妻の苦しみは言葉になりません。特に最後の2年半は癌の病との闘いがコロナ禍に加わり心身の苦痛は激烈の極みにありました。4年間の往復書簡の数は80通を超えます。その内容は「真民さんの真実」を探究するものでした。

片山さん夫妻が、「真民さんとの20年の感謝」と「真民さん夫妻の平癒」を願い、四国八十八ヶ所巡礼を始められたのが平成17年5月、私が「あの話」を聞いたのが同年9月、片山夫妻が高野山詣をされたのが平成18年8月28-29日、「あの話」を片山夫妻に伝えたのは平成29年1月6日でした。まったく心当たりのない「あの話」を知らずして巡礼をされたのです。

片山夫妻が真民さんへの忠誠と偉業はここに記したことにとどまらず、佐藤宗幸コンサートの開催と赤字補填、ピー子物語等々と214号に及ぶ「詩国の朴」には真民讃歌が満載です。その一部を原文を縮小して巻末につけ、毎月詳細な記事が豊かに書かれているのをご覧いただきたい。また、年月順に214号全てを要約した年譜形式のものは真民さんの活動も詳しく記されており、お二人が二人三脚で過ごされた20年の歳月を旅することができるものと思います。

片山 克、絢子夫妻の真民さんへの揺るぎない忠誠心、この誠実な友情において、真民さんのお金を「くすねる」ことができるでしょうか？

真民さんの本心は何だったのでしょうか？

ここまでお読みくださった読者の皆様に感謝しつつ、私はお尋ねしたい気持ちでいっぱいです。

謎めいた「あの話」を私の視点（人間の罪）で追求することはもはや読者には十分ご理解頂いたと考え割愛しました。人間の罪深さを心底からえぐられるような人間模様がどこまでも想像できます。

旧約聖書には「わたしは恵もうとする者を恵み、憐れもうと者思う者を憐れまむ。」とあります。

人間には裁くことはゆるされておられません。神は真実な御方です。

片山 克様のご冥福をお祈りいたします。

2023年8月8日

小原靖夫

パリ通信・第143号

オルセー美術館「ゴッホ展」

オーヴェール・シュル・オワーズ最後の2ヶ月

11月11日フランスは第一次世界大戦の終戦記念日である。凱旋門下の記念碑に火が灯り、130万人を超える戦死者と400万人の負傷者を悼む式典が今年も行われた。

1918年の終戦から百年以上が経つ今なお世界は戦争や紛争が絶えない。

クリスマスまで6週間だが、ユダヤ人への反発が再燃しつつあり大事なく年の瀬を迎えられたらと思う。

そして、11月はフランス中が大雨と大風の災害に遭い、パリも雨が降らない日がない。週末も雨で遠出も億劫、美術館で展覧会を見ることにした。オルセー美術館で開催中の「ゴッホ展～オーヴェール・シュル・オワーズ最後の数ヶ月」(2023年10月3日から2024年2月4日まで)へ行った。

1888年2月ゴッホ(1853-1890)はパリから南仏アルルへ移り小さな一部屋を借り、「黄色い家」や「ひまわり」など多くの傑作を描いている。ゴーギャンとエミール・ベルナールを南仏に来るように説得し、1888年10月にはアルルでゴーギャンと一緒に絵を描き、絵画論を交わした。12月末ゴーギャンとの口論の末、狂気に駆られたゴッホは自ら左耳を切り落とす。それから度々狂気の発作に襲われ、1889年5月南仏サン・レミ・ド・プロヴァンスの精神病院に入る。治療を受けながらも野外で絵を描くことを許され、発作と湧き上がる制作熱を繰り返しながら数多くの作品を描き、パリとブリュッセルのサロンにも出展する。

右 「オーヴェール・シュル・オワーズ教会」(1890年6月4-5日作)



1890年5月16日サン・レミ・ド・プロヴァンスの病院を出て、ピサロの紹介でオーヴェール・シュル・オワーズで開業しているポール・ガシェ精神科医の治療を受けることになる。ガシェは自身も絵を描き、絵画のコレクターでもありゴッホから贈られた作品も所有していた。5月20日オーヴェール・シュル・オワーズに到着し、7月29日ピストル自殺するまでの2ヶ月間に制作したゴッホの作品を可能な限り集めたパリ・オルセー美術館とアムステルダム・ゴッホ美術館の共同展覧会である。



ゴッホはオーヴェール・シュル・オワーズで73点の絵を描いており、この時代の作品はオルセー美術館が7点、アムステルダム・ゴッホ美術館が8点を所蔵するのみである。散逸して個人蔵となった作品、国外の美術館所蔵品を借りての貴重な展覧会で、オーヴェールのカフェの娘「アドリーヌ・ラヴー」(個人蔵)の青は美しく、ゴッホの肖像画の強さ、新しさ、大切さが分かる。(左の写真)

今日では世界中が絶賛するゴッホであるが、生きていた間の評価は高くなく、まして精神を病んだ画家を正當に理解する批評家は少なかった。画商だったゴッホの弟テオ(1857-1891)がゴッホの生活費を負担する代わりに作品の権利を有していた。弟テオとの間に交わされた652通の書簡は絵画作品に劣らず貴重なもので、今日アムステルダ

ムとパリに主要な作品が残された影にはゴッホの才能を信じて支え続けてきた弟テオ、そしてテオが兄の後を追うように半年後にこの世を去ると、兄弟の意を引き継いだゴッホの義理の妹(テオの奥さん)ヨアナ(1862-1925)の存在があったことを読むことができる。

ゴッホがサン・レミ・ド・プロヴァンスからオーヴェール・シュル・オワーズに移る間の数日を滞在したパリのテオのアパートマンでゴッホは初めてヨアナと顔を合わせる。生後4ヶ月の息子(ゴッホの甥、ゴッホと同じくヴァンサンと名付けられている)も一緒に、その後オーヴェールで2回会っている。



「オーヴェール・シュル・オワーズの階段」

(1890年5月末)(セント・ルイス美術館)

ゴッホ兄弟が亡くなり、ゴッホの作品と書簡を相続しアムステルダムに持ち帰ったヨアナは何度も何度も兄弟の書簡を読み、ゴッホの価値を信じて作品を護り、ゴッホの名を世に伝えることを使命とした。女性は軽んじられる時代であったから簡単なことではなかったが、今日こうして主要なゴッホの作品と書簡が世に残ったのはヨアナのお陰であると言っても過言ではない。

「親愛なるテオと親愛なるヨ(ヨアナ)へ。ヨに会ったからこれからはテオだけでなくヨと二人に向けて書くことにする。南仏で2年を過ごし、フランス語の方が自分の思うところを伝えることができるのでフランス語で書かせていただく。オーヴェールはとても美しいところだ。古い藁葺き家が点在していて珍しい。(1890年5月20日)」3回しか会ったことがなくてもゴッホの価値を信じて尽力したヨアナ、世に名を残した人の影にはその人を信じて支えた人がいると思った。下「オワーズ川の辺り」(1890年6月作)(デトロイト美術館)



あとがき (小原記)

私が好きなゴッホの絵です。実際に今でもあります。このカフェテラスで食事をしました。思い出の一枚です。

